

第三節　　そふ云ふ事だから凡人には見へるものでない。前にも度々云ふ如く道は形がないから名のつけ様がない。かくて名なし其のないものが却つて貸せてやる。又貸せてやる上によく物を成就する皆自然をかりにゆくが皆貸せてやる。たゞかせてやるばかりでなく之れを成就させてくれる。と云ふ役をなす實に此の位い役に立つものはないが凡人から見へないだから却つてよいと申す

第四十二章　　主意戒強梁之害

道生一。一生二。二生三。三生万物。負陰而抱陽。沖氣以爲和。人之所惡。唯孤寡不穀。而王公以爲稱。故物或損之而益。或益之而損。

第一節　　言万物生于虚無。虚無寡弱可貴。

一二三按一者太極即一元氣也。二者陰陽即天地也。三者天地人也。有天地人而然後万物育。

人之所教我亦教之。強梁者不得其死。吾將以爲教父。

第二節　　言強梁之害

人之所教我亦教之。翼註古人嘗以此爲教而我亦教之。按教之之字指下文。

強梁教父。按梁棟。梁其才之強也。父猶本也。蓋以強梁者不得其死一句爲教之本也。

講 義

此の章は強梁の害と申して強よ張つてはいけないと云ふ事を申す。虚無に本づいて静に安んじてゐるがよいと云ふのをすゝめるので終の方に強梁なる者は其の死を得ずとあるが主意である。

第一節 萬物は虚無から生じてゐるもので虚無が却つて尊いと云ふ。形も何もないところ其處から一が生じてくる。先づ一元氣と云ふものが出来てくる。形も何にもないがやはりあるのでそれを一と云ふ。其れを儒者の方では一元氣と云ふ。それからずつと二を生じ、つまり天地と云ふものを生ずる。此れは皆道理に合ふもので語が違ふから外の學では其れを違ふ様に思ふが。見方がちがふだけで意は同じだ。易に太極とある、その太極、一元氣がわかれて陰陽となると易にもある。其の天地の間に先づ物が出来る。それか人。天地がこんなにして出来てそれから萬物が生ずる。人間が

萬物に先つてできたとして此の三をよばつて天地人の三才と云ふた此う云ふ風に自然からずうつとわかれてくる。がしかし之れを合せるとやはり一になつてしまふ。そこで其れ萬物を見ると陰の方静と陽の方即ち動の方とがある、陰を背に負ふ。背は少しもはたらし動くものではない。又胸腹の方は前に抱いてゐる。そこで動かないものを背に負ふてゐる。それが自然でそこで静なものが動を使ふのであつて静が元である。そこで老子は静を本として動を末にすると云ふことにした學問をたてた。萬物の出来た様子から悟つたのだ。冲と空しく回轉しない氣が和と物に出會ふてさからはない然し一物があると物にさからう。どうしても和せない。無一物にしてゐると物の來る毎に鏡の如くくるものに應じて寫つてやはらぐ。無いと云ふのが實に妙なものだ。中庸にも此の通り

のことを未發之中と云ふてあるがそれが發して道にあたるそれを

和中と云ふてある。そこらが云はゞ中庸のもとである。て中は天下の大本和は天下の達道と云ふて天下中のものが來てもどちらいでも通りぬけてゆかねばならぬ。冲氣は中にあたつて和は情にあたる。そこでなんでも静寡を主とす可き道理を云ふておく。先づ並の人の惡むものは孤寡不穀であるが其のいやがるものを王公たるものは自ら云ふておられる。故に物事は損して却つて益することがある。或るものは其の道理を知らずに無用に外へ心を散らすと却つて内に損してなくなつてゆくこふ云ふ様なわけである。そこで何んでも虚を本にして外へ強よがる様な事はなる可く損してやめねばならぬ。と云ふ理を言ひはじめておく。

第二節 此處て主意を申す、強梁は害になるものだと云ふ。強梁はつよばる事で一吋見るとゑらい様だが其の死然を得ないそれはまあそうて強よばつて血氣の勇ばかり振ふと又先きから強いもの

が出てゝ取りひしいてしまふ。其の死は天然に死ねぬと云ふことだから前にも申すとほり虚無を本に立てなければいかぬと申す。だから私は人を見れば教へを出すけれども此の事を以て教のもととせようと申すどこまでも主意にそごつてゆく。

第四十三章 主意言無爲之益

天下之至柔。馳聘天下之至堅。無有入無間。吾是以知無爲之有益。

第一節 言柔制剛無侵有起下文。

不言之教。無爲之益。天下希及之。

第二節 主意

不言之教按儒佛之教亦歸不言。

講義

何んにもないが却つて益になると申す。

第一節 無爲の益あるに落す、弱が強を制し無が有を動かすと云ふことを申す。

天下の至柔は天下の至堅をあらゆるちらと使ひ立てることが出来る。一番弱い者が一番強い者を使ふ。物を云ふとぢきにわかること風だの水だのは至柔なものだ扇で一寸やれば動き指で一寸ふれば動く。こんなものが一度び大風や大雨になると云ふと山や川や家や人をとんだ目にあはせる。そう云ふ様な事を云ふそれから無有は無間に入る。て形がなくて何にも出来んかと思ふが無有が

あきまのないところへ這入つてゆく。風でもそうだ。どんな防寒をしてもからだへしみこんでゆく。此の道理を以て無爲を以て却つてよいものだと云ふ道理を知つたのであると。

第二節 不言之教、是れは教の極て何れの學問、道理も極は皆此處へ來る、口先の教はしれたもの。極の妙所は口へは出せない。それだから孔子でも吾れ言ふなからんと云はれ釋迦なぞでも一字不説と云ひ孟子でも言ひ難きなりと云つた。

道を體用して體中がまるで教になる。言はずして人が感心する様に本を立てんければ眞の教とはならない。無爲は自然の道理にまかせて働く事を云ふ。無理な事をしない是れが一番よろしいので天下中この二者に及ぶものはないと申す。

第四十四章 主意言知足知止之長久

名與身孰親。身與貨孰多。得與亡孰病。是故甚愛必大費。多藏必厚亡。

第一節 求必貪貨之害損亡其身

知足不辱。知止不殆。可以長久。

第二節 言知足知止之長久是主意。足則止

止則足。兩言一意。足止並兼言名利。

講義

此の章は物はこゝが足り所だと云ふことを知らなければ際限がないと申す。そうすると却つて長久すると云ふ。

第一節 人は何でも名とを貨を好む。それで大抵のころで足る

を、知、り、止、る、を、知、ら、な、い、と、名、利、の、た、め、に、身、を、害、す、る、様、に、な、る、ぞ、と、云、ふ。さて名と自分の身とどちらが一番親しいものであるか。名ばかりよくても身かなくては、い、か、ね。ほ、め、ら、れ、な、く、て、も、身、の、あ、る、方、が、よ、い。自分の身と金とどちらがまさるか、多はまさるの意と云へば身があつての金だ。どうしても身分が一番大事だと承知される。そこで此れは勿論身のまさると云ふこと。名利を得ると身を亡ふとどちらが病しいぞ、此のわけ故に名を求むるのはげしい甚愛は必ず大いに精神を費す。そこで名利のために精神を痛め身を亡ふ様に至る。それから多藏は必ず其の害があつて大いに其身を亡ふ様になる。是れはどうも名譽と金のために命を捨てるものが多いのを云ふのだ。今日の議員になると云ふのも名譽のためだが、それがために身代を失ふのが多い。あれは自然の名譽ではない無理やりの名譽だから長持はしない。金も費し身を亡くするのである。

第二節　そこで足るを知ると辱がない。止まるを知らればあふな
とところつまでも出ては手がない。かくの如くに足るを知り止る
を知らば却つて長かもちがすると云ふ。

第四十五章　主意言清淨爲天下正道蓋人力
不若自然也。

大成若缺其用不弊大盈若冲其用不窮大直
若屈大巧若拙大辨若訥

第一節　言自然如不及人力

大成若缺云々按成者必弊盈者必窮直者必折巧者
必勞辨者必躓故若缺而不弊若冲而不窮若屈而不

折若拙而不勞若訥而不躓其術在不用人力而從自
然而已故躁之用人力不若靜之從自然又按日計不
足歲計有餘之意又按一物小成不如集大成

躁勝寒靜勝熱清淨爲天下正。

第二節　主意

按唐詩曰心靜身便涼亦此意。

大辯は大いにやべる。勉強してしやべるのでなく自然に口を
衝いて出るのを大辯と云ふ。どうしても喋らずにはあらぬと云
ふ時にしやべる。凡眼から見ると下手の様だがしまひには用をな
す。言ふと云ふのは其の事が通徹するのが用である。無口の様で

あるが言ふ可きに言ふて何んでも自然と云ふものに従ふ。大きなこんな道理を云ふておいて。

第二節　こゝて主意を申す、人の力てやる事は自然に及ばんと云ふ、躁はさはぐこと、寒むい時分に一時は人の力て寒さにかこ様もそれが長がつゞきがしない。静にしてゐると暑にたへられる。静は自然だ。此の方が長がもちがする。扇を使ふより静にする方が長くたへられる。唐人の詩にも心静身亦涼と云ふてあるがあついで分には心を静かにしじつとしてゐると涼しいものである。そこを保つてゆくのが天下第一の正道だと云ふ。正は自然と云ふ事だ。天下の自然と云るも同様である。

第四十六章　主意言知足之利並叙治亂之

利

天下有道却走馬以糞天下無道戎馬生於効

第一節　言知足之利

禍莫大於不知足咎莫大於欲得故知足之足常足矣。

第二節　言治亂之本在知足與不知足

講義

足るを知るが利だと云ふ足るを知らぬと不利益になると云ふ道理を云ふ。

第一節　世の治亂の道理を云ふ、足るを知ると治さまる。そこで天下中のものが道を守つてよく治つた時が道があるので其の時は

走馬とて軍に用ゆる馬がいらぬので其の馬を以て肥料の用に糞をさせる。其れに糞さして肥やすときは五穀はよくとれる。こんな利益はない。其の裏で足るを知らないで道を守らないと互に慾心て勝たうかたうと云ふところからどうしても戦はなければならぬ郊外の田地があつて五穀をつくるところで戎馬を養はなければならぬから平生なら牧場へもつていつておけばよいのに田地を耕しどころかこんな始末では大損になつてしまふ。

第二節 彼の足るを知るが一番利益だと云ふ。治亂の本はいづれも足るを知る知らぬから出てくる。世の禍は足るを知らないより大なるはない。咎は欲するより大なるはないこんな事なら禍咎が出てくる。故に足るを知ると云ふ事は自分きめ次第で此の位でよいと安心してゐる。此れが即ち足りてゐるので常に充分だと安心してゐる。充分だと云ふことは人間にはおそらくないことだが

そこで大抵なとて分をきめて足るを知る事が大事であると申す

第四十七章 主意言執本而不追末知理而不

求形。聖人知理而不求形。求形者勞而無功。知理者逸而有功。又按諺曰歌人生而知名區亦此意。又按陽明拔本塞源論亦此意。是聖人不出戶而知天下人情也。孟子萬物皆備於我亦此意也。

不出戶。知天下。不窺牖。見天道。出彌遠。其知彌少。

第一節 論内外出入之利害

是以聖人不行而知不見而名不爲而成。

第二節 引聖人證之。

是以聖人云々「按言忠信行篤敬雖蠻貊其行矣。」

講義

聖人は常に道の本をつらまへてゐて末い走つてゆかない道理をよく知つて無理に形の上に求めない事を申す。

第一節 内外出入……内入は本て之れをつとめれば益になる、そこで戸を出てずして天下中のことがわかる、自分のうちのまどをあけて天を見んでも天の道は見へる。と云ふは道理を云ふので道理は元より空なもので。形を見んとすると天下中をまわつて歩かんければわからぬが道理を悟るときはそんな事はいらぬ日や月の回ることや山や川のありかを一見ないでも理て以てわかる形をのけて道理を悟ると云ふと勞せずしてわかると云ふ。是れはちつと

内にすわつてゐることを云ふ内にはいけぬと云ふて形を追ふて歩いてみたりすることばかりやると云ふと道理を見ることが出来なくなる。其の本を知らずに其の足ばかり運らしたとて其の知は却つて少い。と云ふものである。歌人はいながらに名所を知ると諺にもあるがまあ無用の勞をせずして知れる事があると云ふ

第二節 このて聖人を引いて前の道理を證據だてる聖人と云ふ智慧のある人は歩いて行かぬでも天下の様子はどんな風だかちやんと知つてゐる。形を一一見ないでも名をつけてやる。なさずして自然になしてゐるから萬事何事をも成就する。これは誠に勞せずして功のあるので無形の道理をよく知つて居れば象は見んでもわかってくる。云ふ事がうそでなく行ひ篤敬なればどんなところへ行つてもさからはないから入れられる。と云ふ様に孔子は云つて居られるがそれは人情をちやんとどんな物だと道理上から知つ

てゐるからの事で理を知らないと一歩いていつて見なければならぬ、やはり其の言が今日の世で其の通りであるから妙だ。

第四十八章 主意言無爲可以取天下

爲學日益。爲道日損。損之又損。至於無爲。無爲而無不爲。

第一節 言爲道至無爲。按爲學似荀子朱子

外修之學爲道似孟子陽明內修之學孔子兼之。

取天下常無事。及其有事不足以取天下。

第二節 言無爲之功

講 義

人力を用ひず無爲ならば天下が取れると云ふ。

第一節 道を治むる者は無爲に至らざれば極點でないところ云ふ様なことを云ふ。そこで之の道理を悟つておかぬとわからぬ、學に二つある心を修める學問と形の上の技藝を修める學問とある。こゝは技藝を通りぬけて了つた後の心を修める學問を云ふ。そこで學をすると云ふと日に日に色々な事をおそはるから日に外をおぼへるこれは技藝の方で道を學ぶ學問は外を損せようとするからなくして了ふとかゝる。覺えた事をなくし又一つなくし又なくし人力では何んにもしないと云ふところ、自然にまかせてすると云ふ事になるとどうせぬてもなされてゆく。

第二節 無爲無事を以てすれば天下がとれる。人力でする様な事ではとても天下はとれない。そう云ふ大きな効能があるかと云

ふ。天下を治めるのは向ふから治めて下さいとやつて來なければ
ほんとしてない。向ふから押し上げてくる。仁者は天下に敵なしと
云ふわけになつてくる。すると又自ら治め様と云ふことになつて
くる。そこで一寸この事をきくとおどけるが老子の學を引き延ば
した莊子の大宗師篇には其の順序がかいてある。其れは別に莊子
に就てよくく味つて貰ひ度い。

第四十九章 主意言聖人以百姓心爲心故百

姓心服

聖人無常心以百姓心爲心善者吾善之不善
者吾亦善之德善信者吾信之不信者吾亦信
之德信。

第一節 言治術

德善德信「政正」一作「得美矣」得信矣「可從」。按各成「眞用」
是公益也。又按善不善者信不信者與「二十七章」一聖
人無棄人同意。

聖人在天下歛然爲天下渾其心。百姓皆注其
耳目聖人皆孩之。

第二節 言治効

講義

聖人は一體の人民の心を心としてゐるから人民が自然と歸服し
てくるとまあ此ふ云ふ様なことを云ふ。

第一節 聖人には常のきまつた主義と云ふものがない。下方の大勢の百姓の心が自分の心で自分が是非とも斯ふ云ふ風にせんければいかぬと云ふことはない。公平なもので天下中の心と同一になつてしまふ。皆んなの慾を一身に集めて皆んなの満足する様にしてやるから下のものが歸服せんではおれなくなる。此れがつまり聖人の慾と云ふものだ。ところが下の百姓には一樣の心がない善者も吾れ之れをよしとし不善者も吾れ之れをよしとする。つまり人々に應じた使ひどころに用ゆる。つまり善を得ると云ふことだ。徳は得て善を得ると云ふこと、信者は元より之れを使ふてやるうそをつく不信のものにも用ひてやる捨てる者としては一人もない信を得るの事を云ふ。吾子だから捨てられもせぬ。わるければ悪るいなりに育て、ゆかねばならぬ。それが自分の主義だなどと固ると一に固つて了つて大仁は出来ない天地萬物一體之仁なぞと云

ふ王陽明先生の様な極意の仁は出来ないこれらはやはり其の大仁を説いたのである。

第二節 右様な心で汲々として天下を治められるから百姓は耳目をそへて聖人の方へ注いてくる。聖人の方から見ると只吾がこしらへた赤ン坊の様に皆んなの思ふことをとげさせてやる。此處は言ひ方が變だが孔孟の云はるゝも同じことである、老子ではおきに無欲々と云ふが、と云ふは私慾をなくせよと云ふので、石佛の様になれと云ふのではない小慾を捨て、無慾の大慾を爲せと云ふので、ある。

第五十章 言聖人無死

出生入死生之徒十有三死之徒十有三人之

生動之死地十有三夫何故以其生々之厚。

第一節 言常人生死

出生入死翼注出自無往有入自有歸無也。按生死一道。唯有出入之異而已。

生之徒十有三按試以生死之人爲十分。由天命而生死者有三分。又其人動作無常自求入死地者有三分。是以求生三遇厚也。非生死之道。有九而不生不死之道一而已乎。老子言其九不言其一。使人自得之以寄無思無爲之妙也。又按生々求生也。非自然之生。

蓋聞善攝生者陸行不遇兕虎入軍不被甲兵

兕無所投其角虎無所措其爪兵無所容其刀夫何故以其無死地。

第二節 言聖人無死上節言十中之九此節

言十中之一。

以其無死地按言形死而精神不死蓋雖兕虎甲兵無奈精神何也。又按常人之死亦其魂魄皈一元氣到底不死。但聖人死一貫保其神謂之無死地不如常人昏々與一元氣混合。

講 義

此の章は聖人は遂ひに死なないと云ふ事を云ふ。

第一節 先づ最初に並の人に生死がると云ふことを云ふておく後の所で聖人は死なないと云ふことを言ふ出生入死と生きたり死んだりするものを勘定すると先づ死ぬる者が十人あるとして勘定する。生の徒も十人あるとする。並みの人の死ぬる徒が十の内に三人。こりあもう天然で壽命によつて生き死にする人を云ふ眞に壽命が盡きたのでなくわざと事あつて死ぬるのが十人の内に三人はある。十人てかぞへて九人だけ。世間並で云ふなら六分が並に生死し三分は變て死ぬ。それ何の故ぞ。生き様くくと云ふ方へ厚い無理な事をして生き様とするからそこで天然をそこなうと云ふことになつてくる。

第二節 そくて聖人の死なないと云ふ事を云ふ、九分は前の通りだが一分通りはつひに死ぬことがない。けだしよく衛生するものは。衛生ははじめ老子から出て莊子に出てゐる攝生は衛生と同様

である。其ふ云ふ聖人は陸を歩いても野牛だの虎だの様な猛獸にあはない、よくそれに出會はない。又軍にはいつても甲兵の害も被らずきずやなどを受けて戦死する様な事はない。上を受けて咒と云ふ大きな牛も角を人にさし入れる所がない。すぎがない。又虎も人を見れば爪をひきかけんとするもそれを聖人にはどうもしない兵も其の刃をいゝことが出来ない。それはどう云ふわけてそんな不思議なことだらう。それは元來聖人に生死なきを以てゝある。何んぼ聖人だとして人間だからそんな事はあるまい。一寸わからぬ事を云ふ様だがそれはつまり聖人は形より精神が大事で形はなくなつても精神は萬世へつゞいて生いてゐるからである。眞の道理はそれだ。それをまことに受けて老莊の學をすると死ぬる事はないのだと考へたらよくない。言を以て意を害せずてやらなければいかん。孔孟の言は正直だが諸子特に老莊などは語を氣をつ

けて見んといかぬ。支那では大いにまらひを生じて不老不死だと云ふ様になり道士と云ふが出来て老子を神に祭る様になつた。神仙の薬だとしてつまらぬものを吞んで死んだ天子も澤山ある。虎に食はれ様が戦死せ様が精神は死なないと云ふただけのことである。

第五十一章 主意言玄德之貴

道生之德畜之物形之勢成之是以万物莫不尊道而貴德

第一節 言萬物尊道德

道之尊德之貴夫莫之命常自然故道生之德

畜之長之育之亭之毒之養之覆之生而不有爲而不恃而不宰是謂玄德

第二節 言道德之可貴在幽玄不可知之中

亭之毒之按亭毒二字諸本多作成熟可從

講義

此の章は玄德と云ふて其の徳ぐらひ尊いものはないと云ふことを云ふ。

第一節 世の萬物は道から出たのだからそれを尊ばないものはない。之の字は形のある萬物を指して云ふ。萬物は天の道より生じ、その道と云ふも自然と云ふものにほかならぬ。天の道が萬物を生じ、天の徳が萬物を養ふ。まだ道德が人に落ちないで夫にあると

きと云ふ。そこで物に形が出来、出来はじめると、人は人、獸は獸と云ふ風に之れを成就する。勢ははじめは一寸したものだがしまひには大したことになる。形が出来はじめると後から後からと勢がついてくる。其れだから勢ひ之れを成すと云ふ、かゝる風に自然の道は天地萬物生成の大本であるから即ち自然の道及び其の道から生じた徳を尊ばぬものはない。

第二節 さて其の道德の尊いところはどこにあるかと云ふ。遂ひにそれは玄て知るに知られないと云ふところへ落してしまふ。道の尊徳の貴、今日尊いと云ふは天子が云ひつけられる命令が尊いと云ふ道德の高い丈けは誰れも云ひつけたものはない。自ら尊ぶ天命で天自然に尊い。人て授けた位は尊いが其れが又わるい事をするとはがれてしまふ、道德だけは決してはぐにはげぬだから眞實に尊い、故に道之れ萬物を育し、生し、畜し、長し、亭し、毒し、此の毒しは妙

な字であるが外の本には亭字は成に毒の字は熟になつてゐる。亭毒でも理屈をつければ解けぬ事もないが成熟の方で解した方がよい様に思ふ。養之、覆之、とこう並べ立て、元は道德から起つて其の道德は萬物をどうしても養ひたて様としてゐるものである。萬物はそんなおかげを受けてゐる。然るところが私がこしらつたとて道德はえげらない。生して恃まず萬物が長じてきても私が私にとゑらがつたり又はきりもりをせない。そこでどうもわからぬ。深くおくがふかくして名のつけ様がないそこで之れを玄德と云ふ自然と云ふお方はどんな方かわからん、そこで天地萬物ことごとく自然から出て來たので自然位ひ尊いものはないと云ふことに。

第五十二章 主意言習常不易之道

天下有始以爲天下母。既知其母復知其子。既

知其子復守其母沒其不殆。

第一節 言大意

塞其兌閉其門終身不勤開其兌濟其事終身不救。

第二節 一正一反說守母之候

塞其兌閉其門翼注兌口也。塞口閉門謂守母終身不救按言不救其身之害

見小曰明守柔曰強用其光復販其明無遺身殃是謂習常。

第三節 申說守母之候發主意

見小曰明按小要也見要則大明所謂不出戶知天下也。

講義

此の章は習常と云ふことを云ふ。習はしばしば重ねてすること初めてならふは學ぶで學ぶのを復してするを習と云ふ。今の人は習の字をよくまちがへてゐる。それで習は重ねる意で常をかさねるいつもかはらぬものだと云ふ。老子の道はいつもかはらぬものだと云ふ。だんだん前から言つてそれを習常と云ふに落してしまふ。

第一節 此のところでは習常不易の大意を云ふ。此の天地の間

には萬物が澤山ある。それには初めがある。即ち自然の道で、それが天下の母の様だと云ふ。皆始めから生れ出たのだ。已に其の母を知る、已に其の母を知つて其の子即ち萬物のことを知る、已に其の子を知つて母を忘れてはならぬ。生れ故郷を忘れないで其の母を守るが肝要。すれば自分が没するまで咎はない。無事に天然をおへる事が出来る。とかく自分を生んでもらつた母を忘れてはならぬ。元の母を忘れずに其の母を守つてゐるとあぶなくない。元が自然から生れたのだから世の中の自然の道を始終に無理なしにやつてゆけばよい。無理をすれば母にそむく。無理をしない、と云ふ事がつまり母を忘れずにと云ふ事になる。

節二節 是處では前の母を守る工夫を云ふ。どう云ふ鹽梅にしたら母を守れ様と云ふ事を云ふ。兎易にあるので兎は口の形つつまりなるたけ口をふさぎそうして門口をちやんとたてゝ了ふ。此

れが工夫だ。どうも口から大きな禍を引き出す。なるたけ口をとぢふさいているのがよい。そこで餘儀なく口を叩かんければならぬと云ふときにはじめて口を開くのが自然である。それは莊子にもくはしくかかれてある。已むをえざると云ふことが始終云ふてある。ひもじくてくはねばならぬと云ふ時に食ふとうまい。一杯腹にあつて食はふとすると却つて生々之厚きて其れがため厄になる。こんなにすれば終身つとめ苦しむぬでもよい。其の裏て一旦口をひらいて云ひ放題をすると其の事をなんでもなそうとしなければならぬのであぶない。必ず厄にかゝる。救ふにすくはれぬ事になる。

第三節 母を守る工夫から習常のことを云ふ。小を見る、是れは小さなところを能く氣をつけて見なければいかん。小さなところに大事なところがある、是れを見るを明と云ふ、それから又強よばる

と云ふとひつくりかへる却つてよくない、柔を守つたが却つて治まると云ふ、頭がちになると却つてこける。デットよい處を守つて下から動いてゆくと却つてよい。光を出さぬと云ふが老子の學で、内に光のもとがあると其の光を和けて明るいとこゝろへもどしてしまふ。光が何んでも外へ出てびかびかするのがわるい。丁度、人に才がある其の才をはたらかせて人の前へ出て鼻の先きて才氣を出す様になると。人ににくまれる。うはべへ出た光を元へ戻して了ふと厄がなくなる。其の口をふさぐと云ふのも同じことだ。其の身の厄をのこすことなく。又従つてあぶない事もなくそこで常にこゝろ云ふ風にしてゐる。之れを習常と云ふ。常に柔の方を守つて居れと云ふのである。決して無理をしてはならぬと云ふ。

第五十三章 主意言小知不知大道

使我介然有知行於大道唯施是畏大道甚夷而民好徑。

第一節 綱

按介然特立貌。言以小知行大道其施設建立欲爲一己故怵々然常畏民好徑。按言小知安小徑。

朝甚徐田甚蕪倉其虛服文綵帶利劍厭飲食財貨有余是謂盜夸非道也哉。

第一節 目

大道爲公利也。小知之人利之一已。而不知他害是盜

兮公利也。

講 義

小知の人は大道をわきまへる事が出来ないから無爲自然の道を行ふ事が出来ないと申すのが此章の主意である。老子はなんでも小とチツボケな事が大嫌ひであるからいつも大智とか大道とか云ふ虚無の道に叶つた事を楯にして小智とか小道とか云ふコマ／＼した人間細工を斥ける。

第一節 小智を以て自然の大道を行ふ事はチト六ヶ敷い若し私しをしてどうか天下を治めて下さいと頼んで出る者があつたら私しや畏ろしいから御免を蒙ると云ふ、とまあひどく荒い事を申すと云ふのは世間なみ／＼の人は大道の甚だ平夷にして行き易いのに悲しい哉ズーッとと平かな大道を知らずして曲りくねつた小路を

歩みたがるつまり大道を知るの大智がないから私しが虚無自然の治め方を施してもとても世間の人にはわかり切らないだろうと申す。

第二節 小智の非道をそしるココの朝と云ふは王弼は宮室也と註し韓非子は訟を聴く役所であるとした、どちらでもよいが今韓非子の説に従つて解くとしよふ、世間の人が小智に走つて邪な徑を好む様になると誰れも彼れも自分の欲ばかりに眼をくらす、其の揚句が御上の御裁判までも仰いて人の物を取とつてやろう云ふ様になると裁判所は朝から晩まで訟の人が來づめて其邊には草一本も生へもせず徐と綺麗に掃除がされる、百姓は百姓で自分の肝心な仕事をそつちのけにして小利を争ふものだから田畑はダン／＼荒れる、米や麥が收穫なくなる、すると倉はあつても中に一つも米が入つてゐない其の國は自づと貧乏になつてくる所で又上に立つ者がセ

ツセと私しの欲をかわき已れ一箇の榮華即ち文綵を服し利劍を帯び云々と云ふ仕末に人に驕り高ぶつて見せる、是れこそ道を辨へない小人のはびこつて來た印て是れを盜奪とて盜人が盜んで來た品物をわざと人に示し誇る様なものであると云ふ。

第五十四章 主意言以己之自然、知人之自然、不自然。

善建不拔、善抱者不脫、子孫以祭祀不輟。

第一節 言己之自然。

按二善皆謂自然善建猶樹木建地善抱猶藤蘿抱物脩之身其德乃真脩之於家其德乃餘脩之於

鄉其德乃長脩之於國其德乃豊脩之於天下其德乃普。

第二節 言自然之効。

按多少之字皆指上文善建善抱

故以身觀身以家觀家以鄉觀鄉以國觀國以天下觀天下吾何以知天下然哉以此。

第三節 言察他以己。

以身觀身按上身己身也下身人身也下文倣之孔子忠恕之道孟子萬物皆備於我之理亦不外於此。

天下云々「按天下外無天下莫以辭害意」

講義

此の章では人は何れも自然の道を辨へて能く身に執り行つたなら誠に長久安全子孫必ず祭を絶たぬと云ふて自然の徳をほめた。

第一節 善建善抱など云ふは何れも自然に建ち自然に抱いて邪でない事を申すので木は自然の道に従つて地に生へるから抜けない、藤や蘿などは自然の性に従つて物に纏るのであるからなか／＼離れない共に自分自身それ／＼の徳を守る事をこうまゝ例へて申す、軍人は軍人、學者は學者と云ふ風に各持ち前の職なら職の本分の性を守り家々の徳を破る事がなかつたならば子孫繁昌、祖先の御祭りは絶やそうにも絶へはせぬ、是れが一つ間違つて自然の道を失ひ家々の徳を損する様な事があつた日にはいくら子孫の者が長久を

願つたとして其れはトテも駄目、お祭り所の騒ぎではないと申す。

第二節 自然の徳の貴い事を口を極めて申す之の字は自然の徳を指して云ふ、徳の効能は誠に廣くて高い、例へば之れを身に脩めたなれば體に徳の光が自つと耀き天性を十分に全ふする事が出来ると云ふ風に一家、一郷、一國、一天下、盡く其れ／＼徳を修めたなれば其の眞の徳は天下中に充ち渡つて人君は人君、臣民は臣民各其の所を得て天下は誠に泰平此んなめて度い事はない、是れ即ち徳の御影だと申す。

第三節 天下の事すべて己れを觀て盡く案ずる事が出来る丁度天下は己れ一人をズット大きく擴げた物の様だと申す、孟子は萬物皆我れに備ると云つた理も亦此の節の主意とよく似通つてゐる、前の節を受けて斯様であるから我身を事として他の人の身を觀るよ云ふのは我身が天徳を保つてゆく時は長久無事、人も其の徳を全と

すれば屹度長久無事になる事が出来るものであると我身の痛さに人の痛さを察するも同然一家一郷一國一天下盡く然り。そんならなぜそうなるかを知るかと反問すれば此を以て也で即ち先き申した通りたゞ我が一身の道理より推して天下までも推し計る事が出来るかと又元へ戻して言ふのだ。

第五十五章 主意言專精柔和之德常久不易

含德之厚比於於赤子。蜂、蠱、虺、蛇、不螫、猛獸、不據、攫、鳥、不搏。

第一節 言精和之德如赤子是綱。

骨弱筋柔而握固。未知牝牡之合而全作精之

至也。終日號而不嗶和之至也。知和曰常知常曰明。

第二節 詳目。

益生曰祥心使氣曰強物壯則老謂之不道不道早已。

第三節 反說

講義

此章は食徳の厚き人を賞めて申す、老子と云ふ人は何時も奇抜な言葉を使つて人を驚す是れが又老子の偉い所であると共に老子の書物の面白い所である。

第一節 精和の徳は丁度赤ン坊の様な者だと申す、何事によらず極の無い所を赤と云ふて赤貪赤地などの熟字も出来てゐる赤子と云ふも其れと同じ意味で赤ン坊には欲もなく智もなく我れがくゝの邪な心もない、天真自然の徳其の儘誠に尊いもので丁度それが含徳とて徳をデット顯はさずには含み持つてゐる人の様なものだと思ふて置いて。サテかゝる含徳の厚い赤子の如き人には自分から進んで目論む欲と云ふものがないから世涉りする上に物にさし支りが起らない、蜂蟻、猛獸、攫鳥等云ふ人を害す性のものも敢て手向ひはせぬ、猪でもそうだ人が變な真似をするから飛びかゝつて來るのて知らぬ顔の平氣でゐれば猪の方でもあの人はいじめをいじめる人ではないからと先きに安心するからどうもせぬ。

第二節 精和の徳の効能を詳しく述べる、赤ン坊の骨や筋は弱くて軟いから物を握るにも固くしつかりする牝牡の合は即ち男女の交

りを云ふので世の中に男女の色ほど危いものは無いが赤ン坊の如き含徳の厚き人は一向に色の道を知らないだから却つて身を保し長生する事が出来る。と云ふのは其の心が誠に欲もなく知なく綺麗サツパリとしてゐるからだと申す、又それと同じ様に赤ン坊は朝から晩まで能く泣く、泣くが然し聲が暖れないと云ふのは泣く心に一向喜怒哀憎の情が無いからである、只だ聲の出るに任せてオギアくゝとなくばかりである、是れと云ふのも心が和いてゐるからの事だと申す、常と云ふ子は變化なきの意で伯は曇りなきの意中庸にも精和の徳を讀へて天下の達道なりと云ふてあるが全く此邊の心持に外ならぬ。

第三節 無理は大毒であると申す、生に限りあり氣に限りありそれを亂暴にも欲とかはいて生を益し氣を使ふのは悪い事、自然の道に叶つて居ない不道である、不道は速に已む氣を付けねばならぬ

自然の性に従ひ自然の徳を食ひ保つてゆけと申す。

第五十六章 主意言玄同之徳貴於天下

知者不言言者不和塞其兌閉其門挫其鋭解其分和其光同其塵是謂玄同

第一節 言玄同之徳

故不可得而親不可得而疎不可得而利不可得而害不可得而貴不可得而賤故爲天下貴

第二節 言有玄同之徳者獨立不恃人人力

無奈之何故貴於天下蓋天爵不及人爵也

講義

先きの章では口を極めて精和の徳を賞めた、それと同じ様に此章では専ら玄同の徳を賞めて云ふ、精和の徳よりはも一歩進んだ徳が即ち玄同の徳で即ち道の本と合一になつた徳を云ふのだ。

第一節 始めから直ぐと玄同の徳を申す、何でも物の極のハテは口や筆では到底言ひも得ず書けも出来ぬ眞に道の極意をチャンと心得てゐる大智の人はなか／＼めつたに口に出して喋々せぬ、言ふ者に限つて生半熟の青冬瓜道を去る事千里又萬里、其兌を塞ぎ其門を閉ぢ云々は五十二章に解して置いた通り兌も門も事欲の生ずる所て眞に道を脩むる人はかゝる惡所の門口をピタと閉め其鋭を挫き其紛と解き其光に和し其塵に同じ世間並み外れた事をせぬ決し

て智をほこらず賢を飾らずたゞ塵に同じて俗と一緒になつて平氣
てゐるこれが即ち玄同で道と冥合融和してゐる其れを申す。

第二節 玄同の徳を保つてゐる人は誠に奇妙で自分では世間の
俗塵に一緒になつてゐるであるけれど筋道の通つた徳は自づから
一貫獨立して誠に天下に尊いと申す、玄同の徳を保つ人は一向に虚
心平氣で飾らず慢らず、一寸も外からは徳がありそうにも見へぬ、無
爲玄同でサツバリ人の眼にはつかぬだから親まふにも疎まふにも
利せ様にも害せ様にも貴はふにも賤まふにもイヤるヤ何ふする事
も出来ない一指も手をつける事が出来ない、莊子が物を物として物
に物とせられずと云つたのも同じ意味である、是れ即ち尊い事の頂
上を云ふたのである。

第五十七章 主意言以無事治天下則治以多

事治天下則亂

以正治國以奇用兵以無事取天下吾何以知其然哉以此

第一節 揭主意

「息齋曰我以正治人由人之本正也以奇用兵由兵之本奇也以無事取天下由天下之本無事也凡我之應物者豈以我哉亦由物而已按以正二句客以無事一句主。

以此按此字指下文

天下多忌諱而民彌貧民多利器國家滋昏人

多[○]伎[○]巧[○]奇[○]物[○]滋[○]起[○]法[○]令[○]滋[○]彰[○]賊[○]盜[○]多[○]有[○]。

第二節 反説多事之害。

故[○]聖[○]人[○]云[○]我[○]無[○]爲[○]而[○]民[○]自[○]化[○]我[○]好[○]靜[○]而[○]民[○]自[○]正[○]
我[○]無[○]事[○]而[○]民[○]自[○]富[○]我[○]無[○]欲[○]而[○]民[○]自[○]樸[○]。

第三節 結主意。

講義

禮法制則の末を以てしては天下は治め難い清平無事を以てせなければならぬ、多事は天下を亂す根原であると云ふ事を述べた。

第一節 黄帝の衣裳を垂れて天下治るて無爲無事に天下が治まつてゆかぬては眞でない是れが禮儀あれが法律とそんな事ばかり

に骨を折らせ氣を揉ませて無理矢理に治めたのでは何にもならぬ直ぐに碎けて了ふ、理窟づくめて治めるのが正を以てする方。人民が鹽梅好く言ふ事を聽かぬからと兵を繰り出して頭から泣き寝入りさせて治めさせるの奇を以てする方は一番下手な治め方である、ては何ふすれば好いか、言ふまでもなく無事を以てすれば天下が取れると云ふのが老子の治國の方針、上人君たる可き者が只無爲自然の道に従つて治めてゆきさへすれば自分も安氣、人も安氣、どちらも言ひ合はした様に仲よく丸く治つてゆく、天下の人心は自づから歸服して望まずとも天下は向ふからやつて來るとまあ言ふ。

第二節 天下は無事でなければ治まらないと前節に述べ此の節では其れに反して多事の害を詳しく説いてある、忌諱とは法度の事を指す天下に法度が多いと彼れも此れも皆法度の支障りを受けて人民は自由に仕事を勵む事が出来なくなり追々と貧乏になる、始め

は亂を防がふと思つた武器がゲン／＼數を益すに連れ國家は益々
混亂する昔の代土を握つて白となし木を揉して未となすと云ふた
時はよかつたが人に小智慧がつき出すと色々な目新しい物を造へ
出す人民の爲めに作られた法令とても其の例に洩れず却つて殿し
くなればなるほど人は其の裏をくぐるふと考へるからして盜賊は
益殖へるばかりである多事の害を述べ次に聖人無爲の徳を賞へ
て是れをけなす。

第三節 聖人の云へ我れ無爲にして云々と専ら聖人無爲の徳を
並べたなか／＼に味のある言葉である黄帝堯舜の世の泰平な様子
をあり／＼と眼の前に浮ばせる事が出る、一一講義をせずとも解つ
てのよふ。

第五十八章 主意言政貴悶々。

其政悶々其民淳々。其政察々其民缺々。

第一節 言貴悶政

悶々猶昏々也缺々猶小明也。

禍兮福之所倚。福兮禍之所伏。孰知其極。其無
正。正復爲寄。善復爲妖。

第二節 言人爲之不可以正物

人之迷其日固久。是以聖人方而不割。廉而不
剝。直而不肆。光而不耀。

第三節 悶々之目。

方而不割云々「按四句皆去太甚之道。」

講 義

精和の徳によつた無爲自然の治を述べた。

第一節 閔政が貴いと云ふのが主意。閔々は暗昏な意察々の反對である、國を治むるのに自分の智慧才覺を出さず只無爲にして閔々と暗いかの様にデットとしてゐれば其の民は淳々とよく手厚く治まつてゆく之れとあべこべに苛察な政治をすると民は欠々と足らぬ／＼の心を起し盜賊を働いたり喧嘩をしたりする様になる、だから無爲の治である閔政をせなければならぬと申す、是れも老子の最も大切とする治國の精神である。

第二節 世の中の事はすべて人の思つた通りには參らぬ、當てにはならぬ始終に移り變つてゆくものである、晝夜の變化あるも即ち

是の天地の理に外ならぬ、禍の中に福が潜んでゐるかと思へば福の中に禍が蟠つてゐる事もある、嗚呼誰れか其の極を知らん、とても人爲て世の中の事を左右する事も出来なければ正と矯正する事も出来ぬ、と人爲の天爲に勝つ及ばざる旨を述べて扱て次に左様な理であるからして正と正しき政刑も時に其れが爲めに却つて奇となる様な仕宜ともなるであらうし善も却つて妖となるであらう、

第三節 どの人も昔から善妖正奇の反覆常なきを知らず是等人々の迷こそ誠にすい迷である人爲の害はかほどに恐ろしいものであるぞと云ふて置いて今度は無爲の徳用を説くのである、即ち聖人ともあらう大徳の君子は能く無爲自然の徳を保つてゐるから例へば、自分にキチント折り目正しくあつても人の不正を咎め様ともせず己れ廉白であつても人の貧焚を責め様とはせず己れ直なるもの直をのべ顯して人の曲非をあばきはせぬ、己れに徳の光あれどもそ

の光をテラ／＼と輝して人の汚い様子を照らそうとはせぬ、只もう
悶々昏昏として一向に無爲てあらせられる、とまあ言ふて悶政の貴
ばねばならぬ事を述べた。

第五十九章 主意言治人事天莫若嗇精神嗇

爲重積德重積德爲有國之母三層說其効。

治人事天莫若嗇。夫唯嗇是謂早服早服謂之
重積德。

第一節 言治人事天之本

「韓非解老曰少費曰嗇考異服一作復。呂注嗇其精神
而不用則早復者也。按復々于道也。」

重積德則無不克無不克則莫知其極莫知其
極可以有國。

第二節 言治人

有國之母可以長久是謂深根固柢長生久視
之道。

第三節 言事天。

講 義

此章では先づ第一番に精神を嗇んで用ゆるが好いと云ふ。決し
て精神を過勞させるなど養生の説を持ち出したのである、其れが即
ち重積徳とも云ふ可きもので長生久視人を治め天に事ふる事が出

來ると申す。

第一節 畜字に就ては色々と言があるが此處では韓非子の説に従つてやはりあしむ心持と見るが好い。人を治め天に事ふるには畜と何も欲せず求めずに只自分の精神を無理に使はないが一番だすれば精神は勞れず氣力は減らず五體安全、此んな好い事はないと云ふのは自然の道に従つて無爲なれと云ふ意味に外ならぬ。斯様にして早く道に服してゆくのを早服と謂ひ早服して自然の道を行つてその身に無爲の徳を積む之れを重積徳と云ふとまあ斯ふ讚めて申す。

第二節 そこで無爲の徳を實地に行つてゐる重積徳の人のほたらきを述べる、重積徳の人は自づから無爲の大道を踏んでゐるのだから何んな事でも克くせんと云ふ事はない、出來ない相談は一つも無い、皆んな出來るものだらけた、無爲にして爲さざるなしてあるか

ら其の極即ち際限を知る事が出來ぬ、そふ云ふ人こそ眞に達道の大入て立派に人君となつて國を有つ事が出來るとグット高い効能を云ふて。

第三節 斯様に國を有つての根本たる重積徳あればその國は長久で人民も自ら治まり國はいつまでも泰平である、つまり治國の要道だと申す。長生久視の道は此れを外にして何處に求むる事が出來様かと終ひを強く結んだ。

第六十章 主意言治國之道在不傷害下民

治大國若烹小鮮

第一節 主意

按下文四箇不傷人皆出干此一句。

以道蒞天下其鬼不神。非其鬼不神其神不傷人。非其神不傷人。聖人亦不傷人。夫兩不相傷故德交販焉。

第二節 詳説

按道即上句治國之道。天下治平人民無禍害故不祈鬼神。

又按德民心也。猶民德歸厚之德。謂民心交歸神聖也。

講義

國を治めるには只無爲の徳を垂れて人民の自然に任せ決して其の天性を傷けてはならぬと前章に續いて治國の要道を説く、

第一節 小さな國では無い此處では大國と廣い天下を治むるには丁度小さな鮮魚を煮る様にすれば好いと誠に不思議な事を云ふ是れが此章の主意で魚の煮方と國の治方とが同じだなどと思ふと何だか變に聞へるが一體小さな鮮魚を煮るにはデット鍋に入れたまゝ搔き廻さない、若し搔き廻した日には魚が小さくて骨が軟いから形が碎けて了ふ、丁度其れと同じて人君が大國を治めるには此の様デット人民の自然に任せたが好いと相も變らず無爲の治法を云ふたにすぎぬ。

第二節 ては其れを詳しく説いた、道を以て天に蒞むと云ふは無爲の大道を以て天下を治めると云ふ意味、すればどうなる、と以下は其の効能を云ふのだ、人民が天性を守つて無爲に治つてゐれば罪も造らねば禍も起さない、鬼として鬼神も災を降らす事が出来ないからデット用なしだ、其れを其鬼神らずと言ふた、此の神の字は鬼神と云

ふ時の神でなくて崇りと云ふ意味である、と云ふ譯合て鬼神も崇らねばまして天神も人を傷らず聖人も亦其の通りだから民徳は厚きに歸して何れも神聖な心を抱きさすがの大國も手を拱いてゐて能く治まつて來ると申す。

第六十一章 主意言大國能下故天下服之

大國者下流。天下之交。天下之牝。牝常以靜勝。牡以靜爲下。

第一節 主意

按、交服也蓋承上章交服。

故大國以下小國則取小國。小國以下大國則

取大國。故或下以取。或下而取。大國不過欲兼畜人。小國不過欲入事人。夫兩者各得其所欲大者宜爲下。

第二節 言大小共宣下重在大。

按孟子曰性仁者爲能以大事小

講義

此章では國が治つたから今度は外國と交際するにはどうしたら宜しいか、大國だからと威張てはならぬ能く小國に下るが結局第一等の遣り方であると申す。

第一節 小國が人に頭を下げたからとて人は別に不思議にも思

はぬが人の平生から恐しがつてゐる大國が腰を低くして人に下つたと見ると人は丁度一齊に感服して水の下に流るる様に何れ／＼感心して了ふ、そこで天下中のものが其德に感服して交々歸服して來ると云ふのは先きの大國が丁度牝の如くに静かにしてゐて争はないからてこそあると申す、老子は静かな意味の形容には何時て此の牝を御引合に出す餘程牝が好きであつたと見へた。

第二節 は先きに大國が頭を下げてゐると云ふと今度は謙遜の德を申す、此の章の取字、先きの小國を取ると云ふ時にはなづけ従へるの意味後の大國に取らると云ふ時はうけ入れらるるの意味である、前言つた様に大國が頭を低くして人に遜るゝ小國はその德に感心して小國は大國になつき入つて了ふ、小國が又大國に下れば大國は棄てはせぬ、之れを大事にうけ入れて治めて遣る、左様な譯ですべて物事は謙遜にするのが第一番で下つて取り或は下つて取らる、何

れも安全なものだ、其間にチツトも心配は無いものと／＼大國とても別に大した考はない筈でたと廣く人を兼ね従へんとするばかり小國とても別に是と云ふ考もないたゞ大國に従つて其の御蔭を受け様と云ふ位に過ぎぬ、であるから斯ふなつて見れば兩方とも目的が達せられた譯である、だから大きな者は先づ小さい者に下れと云ふたのだと終を結ぶ。

第六十二章 主意言道爲善人又爲不善人故

貴千天下

道者萬物之奧。善人之寶。不善人之所保。美言可以市。尊行可以加。人之不善。何棄之有。

第一節 言道徳爲善人不善人。

「吳注」道之尊貴猶堂與之與。

故立天子置三公。雖有拱璧以先駟馬不如坐進此道。古之所以貴此道者何不曰以求得有罪以免耶。故爲天下貴。

第二節 言貴于天下

講義

此章では道は善人の爲めにも亦不善人の爲めにもなると申すのが主意。

第一節 道は萬物を生々發育させる本源で或は善人の寶ともなり又不善人の爲めに依る可き方を教へるものであるとまあ大ざつばに云ふて置いて次に之れを賞めて云ふならば市と高い相場にも

上せられ様し又之れを尊行と大事に行り持つてゆけば人に加ふるとして人の上になてる事も出来るのである。道は廣い深い尊いもので善人の師不善人の教何んにても役に立つものだつまり道は善不善を兼ね超越してゐると云ふたにすぎない、凡そ人の不善なる何の棄つる所がこれあらんと云ふ此の一句極めて妙で、人は道を知らぬから不善で若し道を心得て無爲の徳を養へば是れ却つて善人になれるので世の中に何一つ捨つ可きものは一つもないと云ふ。

第二節 此節では天下中で一番尊いのは道であると極言する、故と前の節を受けて天は天子と云ふものを立て三公と云ふものを置き下人民の依る可き所となし以て道をさとし不善をためられる、拱璧と大きな璧玉を駟馬に先立て、進物にするよりは斯様に尊い道と云ふ進物を贈つた方がましだと云ふて。

第三節 では之れを問答體にして尙一層に道の尊い事を述べた

「一體古へ此道を貴んだ譯は如何です」と先づ問ふ、そりあ解つてゐる
てはないか以て求むれば得、罪あれば以て免ると云ふてはないか
此の大利益のあるものが天下の貴てなくて何んだと答へる。此の
以て求むれば得云々と云ふは何事でも一つ爲さうとする時に權謀
術數を用ひては駄目、取り返しのかね禍を惹き起す、たゞ無爲自然
にデットしてすれば望み事は丸く安全に成就されると云ふのはつ
まり無爲の徳を稱した迄の事罪あらば以て免る可しと云ふのは有
心有情て事をするから飛んだ災難を招く、無爲自然にすれば怪我が
無いから自づと招く可き罪も招かずに其事に免るる事が出来ると
是れも無爲の徳をほめたのである。

第六十三章 主意聖人圖難於易故無難爲大

於細故能大。而其本在無爲。

爲無爲事無事味無味。大小多少報怨以德。

本。 第一節 言聖人無爲反常情是圖難爲大之

圖難於其易爲大於其細。天下難事必作於易
天下大事必作於細。是以聖人修不爲大。故能
成其大。夫難諾必寡信。多易必多難。是以聖人
猶難之。故終無難矣。

第二節 發揮主意

終不爲大。按言不爲大於其大之時爲大於真小之時。

講義

此章では専ら聖人の難事に處せらるる仕方をおのべた、すべて聖人は難事を易き時に於て圖り大を小なる時に於て遂げる、故に無難無事能く其の目的を達する事が出来ると申す。

第一節 主意を明にする前に先づ聖人たる可き人の情は普通人とは違つてゐると云ふ處を見せる、何んでもすべて聖人は無爲自然の道をよみ行ふ。物の自然に任せて一寸もさからはぬ、自然の爲を爲とし、自然の事を事とし自然の味を味として一向人間業で此れを細工せ様とはせぬ、例令へば普通人の忘れ難しとする怨でもそうだ、互に怨に思つて報いたり酬はれたりしてゐた日には際限がつかぬ、聖人はテンデ共んな事には頭も傾けぬ始めらぬ一向に忘れて御座る、怨もなければ思もない、只天自然に授つた所の徳を以て一樣にあしらつて行くと一つの事實をあげて聖人無爲寛厚の證とした。

第二節 主意を始めて發揮する聖人は難事となる可き事なら先づ始めて心易い時にチャンと型をつける、大事ともその通り未だ小事である時分に處置を斥けて了ふすべて何事によらず天下の難事は必ず易きに起る、千丈の堤も蟻の穴一つで、九仞の功も一簣で缺けて了ふ何事によらずすべて始めが大事である、聖人は此邊の呼吸を能く飲み込んで御座るから仲々大事には手を下さぬ、小事のうちに屹度處置して了ふ、だからつまり能く大事を爲すと云ふものだ。

惣じて人の頼みを片端からハイ／＼と聞く奴に限つて危ぶないと一緒に多易とて事を容易に心得る者に限つて屹度仕損じる、是らあ能く世間にある事だが老子も三千年前にチャンと此んな事を知つて居られたと見へる、是以て云々と愈終りを止める、聖人猶ほ之れを難しとす故に難きこと無し此の一句大いに妙を極めてゐる、聖人と云はれそ高德な方でさへ事を輕ろんじ玉はずして注意に注意を

加へらるだから難事になるのも大事になるのも軽くてすんで了ふと申す、此の章など大いに日用の道德として最も重なる値打がある

第六十四章 慎終之道在無爲自然。前三節言

可慎終于始。後二節言慎終之道在無爲是主意

其安易持其末兆易謀其脆易泮其微易散

第一節 言始易爲

爲之於末有治之於未亂。

第二節 言慎始

合抱之木生於毫末。九層之台起於累土。千里

之行始足下。

第三節 言終之本于始

爲者敗之執者失之是以聖人無爲故無敗。無執故失。無民之從事常於幾成。而敗之慎終如始則無敗事。

第四節 合論衆人有爲聖人無爲

是以聖人欲不欲不貴難得之貨。學不學復衆人之所過以輔万物之自然而不敢爲。

第五節 專說聖人無爲

講義

此章では専ら終を慎むの道を説いた事を爲し始めるホンの心易い時に充分な注意をして置くがよい、其れには矢張り無爲自然の道を守らねばならぬと云ふ。

第一節 危きを持つは難いが安きを持つは容易の事て其れと同じ様に事が未だ生じない前にチャンと用心して置けば安心であるつまり事を未然に防げる、堅くなつて了つたら始末に了へぬて軟かな時に消せば消しやすい、消は消かすの意事が大ビラになつてからだと六つか敷い未だ漸く成りかけてゐると云ふ微かな時に散ぜしめたならば是れ又最易い、日用の事すべて丁度此の通りであると申して置てサテ次に、

第二節 禍は未だ芽を吹き出して来ない間に取り治めて了へ事を擧ぐるに早きを貴ぶと云ふも此の道理で此處では事の最初を慎

めと申す。

第三節 合抱の木は毫末より生じ九層の臺は土を累るより起り千里の行は足下より始る是は講義するまでもない事て老子が此の語を此處へ引き出した譯は事の終りはすべて其始にあるぞと云ふ意味を教へるためである。

第四節 無爲自然に任せるが何より安全であると申す人間業で強て事を爲さうとすると屹度失敗し何んでも此は己れの物だなどと執り捉ひてゐると屹度あべこべに人に取られて了ふものでは並の人のやる事聖人ともあらう大徳の方は決してこんな事はなさらぬ、デット自分の心を使はないで靜に事の爲り様に任せらるるか、ら却つて都合よく事が治る失敗と云ふ事はないつまり其れが始を慎み終を慎むわけとなる、民の事にかかる常に幾んど成らんとするに於て之を敗る終を慎む始の如くなれば敗事なし是の言葉なぞ實

に名言て日常の教訓として好い、周易にも水を汲むもの殆んど水至らんとして其瓶をやぶるとあるが何事によらず今一步てと云ふ處で魔がさすものだ誰れでも油断して大失敗をする。

第五節 聖人の無爲を申す。いくら聖人だと云ふても慾の無いと云ふ事はない。大いに有る、有るが其の有り方が並の人の慾とは毛色が違ふ。欲せざるを欲すと云ふのは衆人の欲せざるを欲するのてつまり人間の欲を捨てた天性自然の慾を欲するのである衆人は得難きの寶を大いに欲するが聖人は此れが大きらひ、他人の學ばざる事を學んで衆人の天性に過ぎた無理な所のあるを引つめて天性に復らしむる、聖人のする事は衆人のする事とは全然反對である。と云ふのは衆人は自然無爲の道を辨へずに天性を越へた事ばかりを努めてせ様とするに反し聖人は何事によらず天性を傷らぬ様にとのみ心掛けらるる其處が聖人と衆人との岐れる境である、すべて

聖人は今云つた様に天性を全ふする様にとせらるる萬物の自然性を輔ける道理であると申す。

第六十五章 主意言知之賊國愚之福國則至

玄徳大順。

古之能爲道者非以明民將以愚之。民之難治以其智多故以智治國國之賊不以智治國國之福也。

第一節 言智之賊愚之福

知此兩者亦稽式。常知稽式是謂玄徳。玄徳深

矣遠矣。與物反矣。然後乃至大順。

第二節 言玄德大順

與物反矣。然後乃至大順。司馬曰。物情貴智而賤德。然反於物情及順於道。

講義

此章はズット古い昔の事を例に引いて人は愚蒙でなくてはならぬ、智賢は國を賊するものだ。とまあヒドイ荒い事を申すのだが、實は人間の智慧ばかりでは物を動かす事は出来ぬ。天性自然の道を養はねば駄目だと云ふまでの意味を述べたに過ぎぬ。

第一節 此の節では専ら智慧排斥する智慧では國を治められぬと云ふ

彼の有名な秦の始皇帝が愚人の術と云ふのも此處から出て居る。秦の始皇は此の章の文字のみ早合點して真底に含まれてゐる道理を知る暇がなかつた事と見へる。老子の書を斟酌して讀まぬとアンな大きな間違を引き起す餘程注意せねばならぬ。ダン、講義して行くとわかるが此章で云ふ明は世人の云ふ明で老子の所謂愚である。六十七章に吾が道不肖に似たりとあつたあの不肖も世人の所謂不肖であつて老子の不肖ではない。本章で云ふ愚と六十七章の不肖とは共に眞の愚にあらず。眞の不肖に非ずと云ふ事を先づ頭へ入れて置かねばならぬ。又本章で云ふ智は世人の所謂智で人爲の小智詭偽穿鑿の智で自然の大智ではない。丁度知者は言はず、知つて知らざるは上等と云ふ時の智と正反對で老子の最も忌み嫌ふ智である。扱て本文にかからうか、古への道をなす者と云ふは清淨無爲の道を營む者で其等の人は民をして明とて才智をつけ様とはせないで却

つて之を愚にせんとしたと云ふのは民の性をして自然に歸らしめ無知無欲にせんとしたのである。一體人民の治め悪いと云ふのは民に猿智慧小智慧が多くつて信の心が足りないから此の場合上に立つ人が更に智慧を以て取り治め様とすると民の方でもなか／＼黙つて云ふ事をきかぬ、益々智慧才覺をめぐらして上と競争をする右と云へば左、左と云へば右、一朝一夕では到底治まらぬのみか益々亂れて来る、

だから智を以て國を治めないのは國の福であると裏を言ふて賞めてけなす。

第二節 稽式とは法式と云ふ様な意味で古本には楷式となつてゐる、此の兩者は即ち此の兩端其れを知つてチャンと辨へゐるのは天下のさだまりて之れを心得たのを玄德と云ふ玄德と云ふ熟字は老子に能くある字で響き丈けても一寸意味深く聞へる、大順と云ふ

のは非常に能くすなほに治まりゆく事て人も我も禽獸虫魚凡そありとあらゆる天物の萬物が各其生を遂げ其の所を得、無爲自然の道に安然としてゐるのを云ふ、堯舜の世餘り天下が能く治つたので人民は今頃は誰れが天子で御座るか一向に知らなかつたと云ふ様なのは實に大順の至りて井を鑿つて、飲み、田を耕して、食ふ、帝力、何ぞ我れに有らむや、など云ふ時代は老子の最も尊んだ時代である。

第六十六章 主意言聖人能爲天下下故天下

推上之

江海所以能爲百谷之王者以其善下之故能爲百谷之王

第一節 比喻

是以欲上民必以言下之。欲先民必以身後之。

第二節 工夫

以言下之。按如君公自稱孤寡不穀是也。

以身後之。按先天下而憂、後天下而樂。

是以聖人處上而民不重、處前而民不害。是以天下樂推而不厭、以其不爭。故天下莫能與之爭。

第三節 効驗

講義

此章は専ら聖人の天下を治めなさる仕方を説いた、無我無慾にして能くへり下ると民は捨て、置かぬ益々感服して益々尊ぶから命令は能く行はれ國は至極に治まる。

第一節 其の譬て江海を君、百の谷川を臣になぞらへて云ふ、己れは百谷の王であるからと云つて河海が高い所に威張つてゐたんで、谷川の水は江海の方へ集りたくとも集り様がない。そこで百谷の王たる江海が高い所に居らないで低い所に下つてゐるから百川の水が滔々として流れ込み遂に江海の大をなし百谷の王たる値打をあげる譯である先づ斯様に謙徳は尊いものであると云ふ事を一番に示して置く。

第二節 新様な譯であるから聖人の君は先づ民の王たらんとし、ては必ず言を低くしてへり下る、丁度君公自らが孤寡不穀と仰せら

る様なものだ、人民の先に立たうとすれば必ず先づ吾が身を後にして民の幸福を先に希ふ天下の憂に先つて憂へ天下の樂に後れて樂むと云ふのも同じ事である。

第三節 此の節ではかゝる聖徳の明君にはこんな澤山な幸があると申す。人情として驕り高ぶるものを嫌ふのは當然の事であるが聖人は斯様に能くへり下り玉ふにより民の上に座つてゐられても民は一向に頭重しともせない又民の前に居られても民は邪魔にせぬのみか益々之れを推し上げ様とする。吾れもくくと聖人を尊んで天下は自づと太平になる。争亂等は起り度くも起つて來ぬものであると大いに聖人の徳をほめた。

第六十七章 主意言老子所守有三寶

按老子說道高遠如不可企及。然行之人間實地則

三寶猶莊子說道放恣如不可模捉。然行之人間世則
販忠孝二大戒。可以知人間道不高遠放恣。

天下皆謂我道大似不肖。夫唯大故似不肖。若
肖久矣其細也夫。

第一節 先言道之大爲三寶綱

若肖久矣其細也夫。按反說

我有三寶持而保之一曰慈二曰儉三曰不敢
爲天下先慈故能勇儉故能廣不爲天下先故
能成器長今舍慈且勇舍儉且廣舍後且先死

矣。

第二節 言三寶即大道之目

慈。儉。不敢爲天下先。按。慈即儒者所謂仁。佛所謂大慈。天下衆教莫不以仁慈爲本。又按。佛三寶。佛寶。法寶。僧寶。下。貨殖三寶。農工商。儒者三寶。土地人民。政事。慈故能勇。按。慈仁能得人和。故勝。

今舍慈且勇云々。按。反說。上文慈故能勇云々。是正說。

夫慈以戰則勝。以守則固。天將救之。以慈衛之。

第三節 特論慈之効。蓋慈三寶中之最寶。又

按。五章曰。聖人不仁。十九章曰。絕仁。此曰慈三寶之一。

慈即仁也。似相矛盾。是老子賤其名而貴其實也。苟有名則拘名而不變通。故讀老者勿以詞害意。又按。八章曰。善仁。三十八章曰。上仁。皆自然之仁也。老子所取也。故知老子不取僞仁。

講義

此章は老子上下經の中最も大切な處で老子の道をきりつめて三寶と云ふ三つの名の下に收めて了つてある。老子は全章八十一の何れにも高い道を説いてゐるが其の高い道とても人間に當て倣めて行ふとなつた日には要するに此の三寶の中に含まれて了ふ。

第一節 吾が道と云ふのは老子の道で天下人皆盡く老子の道を不肖に似たつまらぬものだと云ふが其れは吾が老子の道が餘り大ききくて素人眼には這人らぬからだ素人眼に這入つてチャホヤされ

る様な道であつたならば昔より瑣細な道で一向尊ぶ値打がない。
 第二節 と云つて自分の道をホノリと示して置いていよく本當の處を明す、一體私しには三寶とて三つの大切な寶物があるぞ、然し誰れしも人であつたら持つてゐる筈だが悲しいかな猿智慧小智慧の爲めにかくれて光を出さないでゐるぞ。

此の三寶は老子大道の目で第一に慈、第二に儉、第三に敢て天下の先とならずと云ふ三つ、慈と云ふのは慈悲なさけの事、儉は惣ての物をつゝまやかにする事、敢て天下の先とならずと云ふのは常に謙遜の徳を守つて差手がましき振舞をせぬ事、又人の先棒に使はれぬ事。此の三寶が即ち私しの平生云ふ道であると斯ふ申す、一體此れから出た事がどうか知らぬが佛教には佛法僧の三つを三寶と稱へ、儒者は土地人民政事を三寶と云ひ、又別に貨殖の三寶とて農工商の三つを云ふてゐる、次に三寶の効能を申すと、慈なるが故に能く勇て

物をいつくしみあはれむ心一杯に能く物に怖れぬ勇氣が出る鶏が雛を育てる時に人が一寸でもいぢらふと直ぐ向つて来る、人間でもそうだ親は子の爲めに火の中水の中へても飛び込んでゆく、かはゆいと思ふ一念から起つて来る勇氣だからなか／＼つよい。又財用を常に儉約にして置くと一朝事のあつた際にのぞんで廣く用ひられる、自ら天下の先とならずして能くへり下つてゐると萬民其徳に歸服して捨てては置かぬ屹度上へ持ち上げられる。萬民化育の事にも預かられる、之れに反して三寶の尊い事を夢にも知らぬ世人は勇氣は慈悲の一念から出ると云ふ事をも知らないで始めから勇氣を出そうとし、廣は儉より出づるものと云ふを知らないで始めから廣ならんとし、人に先つ事の出来るのは謙遜の徳があつて始めてなし得らるるものを其れを始めから先に立たうとする、斯様な無分別ではとても命はない天の生命を全ふする譯にはゆかぬと衷から老

子三寶の徳をほめた。

第三節 此の節では特に三寶の中の慈の徳を専ら説いた、慈悲は三寶中随一の尊ぶ可きものである事を教へると同時に第二第三の寶又々斯くの如しと云ふのである、五章に聖人は仁せず十九章に仁を絶ち等と云つて置いて此處で慈仁の徳を最も大切に云ふのはチト矛盾した様に聞へ様と思ふが實は老子は世間並の仁義慈悲を排して大仁大慈をすいた又一つは始めから慈悲よばはりをせないのは人が名に拘つて自在を失ひはせぬかを氣使つての事であらう、常に老子は此の仁に限らず世間並の事が大嫌ひで、八章に善仁三十八章に上仁と擧げたのは皆自然の大仁で決して世間並の仁ではない、此の節で若し此處に戦争をすると云ふ場合、扱て慈悲を以て味方が心としてゐたならば屹度勝利を得る事が出来るし又守りを續けるにしても必ず堅固敵に落されはせぬものだと言ふ譯は何れも互

に仁慈を盡して仲好くしてゐれば上の者は下の者を、互に吾身を忘れて庇ひ合ふ、如何なる天下の大軍が押し寄せて來ても慈悲の念から固つて一團となつた此等勇士の守りは落そうにも落されぬ、と慈なるが故に能く勇の證據とした。

第六十八章 主意言不爭之徳能用人之力

善爲士者不武。善戰者不怒。善勝敵者不與。善用人者爲之下。

第一節 列舉四不爭

善爲士者按古者甲士三人在車上戰卒七十二人在車下。士使率戰不自戰是不武也。故王注曰士卒之師

也。

是謂不爭之德。是謂用人之力。是謂配天古之極也。

第二節 總束。

此章でも亦大いに謙遜の徳をのべ争はぬのが一番勝てあると云ふ事を申す。

第一節 善く士たるものは自ら戦はぬ士の上等な分を云つたので古への戦争の仕方は少しえらい大將株の甲士が三人車の上にあつて七十二人の兵卒が其車の下につき甲士の指揮に従つて敵と戦ふのが一般の定であつた。善く戦ふ戦争上手な人は一朝の怒りに終生の悔をのこす様な事はせぬ又善く勝つ者はうっかりと敵の相手

にはならぬ、機を見隙をねらつて十分に勝てる見込がついてからかかつてゆく又善く人を用ふる者は人情と云ふ事を能く辨へて能くへり下る、人が感服して其の人の爲めなら命はいらぬなどと言ひ出して戦をするにも守るにもなく、か引けは取らぬ。

第二節 斯様なのを不爭の徳だと申す、人と争はないで能く人に謙遜すれば人は求めずして自分の爲めに用ひられてくる、是れこそ眞に古の至極の道で天の無窮な徳に配するわけだと、一句は一句より急切に疊みかけて末を結ぶ。

第六十九章 此章以兵喻道言慈之不可失。

用兵有言吾不敢爲主而爲容。不敢進寸而退尺。是謂行無行。攘無臂。扔無敵。執無兵。

第一節 言不得已而用兵

禍莫大於輕敵。輕敵幾喪吾寶。故抗兵相加哀者勝矣。

第二節 言兵出於慈哀者勝

哀者勝矣。按。哀者天人助之。哀出于慈。

講義

此章は兵を以て道に喩へ慈仁の心を忘れてはならぬと云ふ事を申す。

第一節 兵を用ゆる者言へるありと云ふは古の兵家者流の言々と云ふ意味、そこで古の兵家者流の言ふには此方から戦争を買はな

いて已むを得ずば應戦するのみ、例へば應戦するとしても敢て寸をも進まずして尺を退くの筆法で一向に争ふ氣が無いからドン／＼と後下りをする、兵は凶器聖人のもとより忌むところ慈心ある有道者の爲す可き事ではない、頭から相手になる氣がないから退くので退くと云ふのは争ふ氣のない事を申す、是れは丁度戦ひに行く丈の備があつても是を頼みにして押し進んで行かないから行いても行かないと同然、折角臂があつても是を頼みにして打つてかゝらぬから臂の無いのも同然、敵はチャンと眼の前に並んで居る事はわかつても此方に戦意がなくて突き進まぬから矢張り始めから敵の無いと同然。

第二節 例令已むを得ずして戦争をするにも慈仁の心がなくて

は最後の勝利は得られぬと申す、禍は敵を軽ずるより大なるは無して敵を軽じたなれば自然と吾が三寶の慈悲、儉約、謙遜の寶を失つて

了ふ様なもので此處に互に敵味方となつて相戦ふには慈悲の力を強くもつた方が勝つ、衰者勝つと云ふのは慈悲の餘計にある人を指したので慈なるが故に能く勇と前章に言ふた通り慈悲ある者は人の死を厭ふて互に敗けじ傷かじと味方を大切にし合ふから軍全體の人が一致して守り必ず固しとなるから容易に敗をとる事はない譯だと言ふ、孟子にも人を殺す事を嗜まざる者は能く天下を一にすと云ふてある丁度此の意味に外ならぬ。

第七十章 主意言聖人不貴人知

吾言甚易知甚易行。天下莫能知莫能行。言有宗事有君。

第一節 言凡人不知吾道自然

夫唯無知是以不知。知我者希則我者貴。是以聖人被褐懷玉。

第二節 言聖人貴人不知

講 義

くどい様であるが此章でも聖人は人智を貴ばないと云ふ事を申す。

第一節 吾人言と云ふのは老子の説く言と云ふ事、自分から自分の事を云ふのでそも／＼吾が日頃くところの言、我が日頃教ゆる所の行は甚だ知り易く甚だ行ひ易いのであるが天下の人が一向に知らぬ、知らぬから尙更に行はぬ言に宗あり事に君ありと云ふのは老子自ら自分の言行をほめて言ふので吾が言ひ分には宗とてチャン

と立派に定つた主意がある、吾が爲す事はチャンと立派に筋の通つた依る可き處がある、と云ふのは無爲自然の道を楯としゐると云はぬばかりの言である、然るに世間の人は其れを知らないばかり肝心の自分を知らぬ、百姓は百姓丈けの事しか、乞食は乞食丈けの事しか、子供は子供丈けの事しか、凡夫は凡夫丈けの事しか知らぬ、自分の望んでゐる境界より先の事は誰れしも知らぬ、丁度其れと同じでそれを知つて呉れる者の希れなのは我なる者が凡を抜いて一段尊いからの事、凡夫では我れか真に尊い道に須んでゐる人だと云ふ事を知らぬからである、と云へばとて聖人は自ら進んで人に知られんとを欲せぬ、和光同塵の徳を修めて自ら愚者と共になつて居られる五十三章にもあつた文綵を服し利劍を帯び等と云つた風に外見を飾らぬ恰も態ときてゐられる様なものだが其の實腹の中には此の天地間て一番尊い玉の様な自然の徳を藏めて居られる。外見を飾

らぬ所に真に尊い値打があると申す。

第七十一章 主意言聖人不表知即與後章同意。

知。不。知。上。不。知。知。病。夫。唯。病。病。是。以。不。病。

第一節 主意

聖人不病以其病病是以不病。

第二節 解

以其病病是以不病。按二句解上二句。

講義

知つたか振りをする人はホントホに知らぬ人でホントウに知り抜いてゐる人なれば決して知つたか振りはせぬものだ、聖人ともあらう人はチャンと物事の道理を辨へて御座る故に知つたか振りなぞ夢にだもなさらぬ、後章と同じ様な意味の事が言ふてある。

第一節 頭の中ではチャンと道を心得て居り乍ら其の顔にも出さぬのはすぐれた上等の人で知らぬ癖に知つたか振りをして體裁を飾る者は病弊である、そこで前々から聖人ともあらう人はチャンと其の道理を心得て御座るから病を病として自ら病をなさらぬ、そこで病なして疣を作る事もなく又罪を作る事もない。

第七十二章 主意言聖人不自見、知不自貴、身

民不畏威、則大威至。無狎其所居、無厭其所生。

夫唯不厭、是以聖人自知不自見、自愛不自貴、故去彼取此。

第二節 明旨趣

講義

此章は聖人が天下を治めなされるには自ら知つたか振りをなさらず、自ら高ぶつてゑらがり玉はぬと云ふ事を申す。

第一節 人君たる人が自らゑらがること人民が歸服せぬと申す、人君たる可き人がをれば人君だからとて無性にゑらがつたり慾張つたり只もう威光に任せて仕放題をすると自ら其處に無理が出来、上の威光はダン／＼と軽くなつて終ひには人民が是を馬鹿にして人

君を人君とも思はぬ様になる、すると人君は人君で厄鬼になつて無理に己が命令を通さうとする人民は意地にも之に逆らふ、サア斯ふなると天下は亂れるばかりで終に大威として天罰下つて國家は滅んで了はねばならぬ破目に陥る。

所生とは人民は民に因つて生を養ふ所以故に民の事を所生と言つた、右の譯で其の所居として自身の居所たる位の持前を輕じてはならぬ、又所生として其の治むるところの人民を厭ふてはならぬどこまでも人君は人君たるのつとめをし、人民は人民たる丈けの行をせななくてはならぬと上を反して戒しめる。

第二節 此處で愈其の本領を明にする、人民を厭ひ棄てて只もう威權一點張りて無理と推しつけた日には天下は到底治つてゆかぬ夫れ唯厭はず是を以て厭はれず、人君は自らチャンと道を心得ても自ら己れは道を知つてゐるから此の通りだなどと見せびらか

さずに玉を布で包んだ様に晦す事につとめ、自ら人君の尊い身であるなどとせずに自ら賤んで能くへりくだる、彼の威張り根性を捨て、此の靜かな謙遜の道をとりに行つてゆく、天下は屹度無事長久であらうと申す。

第七十三章

主意言天道疎大而不失

勇於敢則殺。勇於不敢則活。此兩者或利或害
天之所惡孰知其故。是以聖人猶難之。

第一節 言天惡勇於敢

天之所惡孰知其故按天自然而己自然之理惡勇敢
唯聖人知之故字指下節言雖聖人之知猶難勇於敢

天之道不_レ争_レ而善勝不_レ言_レ而善應不_レ召_レ而自來
 繹然而善謀。天網恢々疎而不_レ失。

第二節 言其故

講義

天道は一寸考へると大まかな様であるが其の實は至極緻密なものであると申す、自然の道はどんな處までも行き渡つてゐるから物に任せ機に應じ把放自在であるが道理に反した事は寸分の用捨はせぬ、天道は始から終りまで一貫して誤りがないと申す。

第一節 天道は慈なるが故の勇は喜ぶが勇に敢なる出過ぎた勇氣は大嫌ひである、向ふ見ずの勇氣は所詮勝利を得がたい、デット忍びに忍んだ揚句、已むを得ずして振つた勇氣は途中折れがせぬ、一寸まあ堪忍の勇氣と云つた具合の勇を不敢に勇と云ふのだ、と云つ

て天道は今申した勇氣はどちらも大嫌ひ、共に利があり又害がとも
 のふ、聖人ともあらう人でさへ敢に勇なり難しとして手出しをなら
 ぬ。

第二節 此處では前節の其故と云つた意味に更に擴げて説いた
 天道は誠に高尚幽遠で測り知る事が六か敷い、天の勝は人が敢に勇
 にして勝つのと譯が違ふ、争はないで勝つと申す、始めから相手にな
 らぬ、相手になつたら早や五分五分の所にあると云ふもの、相手にな
 らぬ、知らぬ顔をしてゐる、其處に妙味がひそんでゐる、時には天の言
 分が通らぬ事もあらうが天は決してさはぎ立て、言はない、善人に
 禍がかかつて善人が天道様も御存じないと見へる等と云ふ様な場
 合があるにして大道はソナラ直ぐに善人に幸を興へ様とあせら
 ぬ、靜に時の至るをまつて天の意を通じ善人に幸を下し悪人に罰を
 負はす、人多ければ天に勝ち、天定れば人に勝つと云ふのも是の道理

てある、爾に出づる者は、爾に反ると云ふ因果應報の教も此れと同じ意味である、或は人の口をかり、人の手をかり、或は風雨の變をかりて、いつとはなしに悪人を亡す真に彈然として善く謀るもので云ふ可き、天道の綱目は至極に疎いが善惡の因果はズット世を通して寸分も漏らさぬ、自然の性に反した事をするのは皆此の綱にかかつてあへない禍を負はならぬ、天網恢々疎にして漏らさず、誠に好く穿つた言葉である。

第七十四章 主意言聖人從天意殺之

民不畏死、奈何以死懼之。若使民常畏死、而爲奇者、吾得執而殺之、孰敢。

第一節 言聖人殺人

常有司殺者殺。夫司殺者是大匠斲。夫代大匠斲者希有不傷其手矣。

第二節 言從天意殺之

常有司殺者殺。蘇註。司殺者天也。

講義

邪な人は自づと亡される、敢て之を此方から手出しをせなくても上に立つ聖人たる人が天意に従つて誅戮なさると申す。

第一節 人情として誰れも死に度くはない乞食をしてまでも生きてゐたがるのが人の情であるが御上の政治が手苛くて三度の飯も食はれぬ様な事になると人民はもうヤケクソになつて殺るされ

ても好いからと云ふので命令を犯し法律を破つて迄も悪事亂暴を働く、斯ふなつた世は末だ、此んな場合上の者が下をどかすに死を以てするとも駄目な話である、仁政を施し民の安心を祈つてやらねば治りはつかぬそこで始めて法律を厳しくして刑罰を設け死を怖それしむる、もし尙其の上と言ふ事を聞かぬ邪惡な奴があつたらドシ、執て之れを殺す、そうした時には民何れも死罰を怖れて悪い事はせぬに違ひなす。

第二節 司殺者と云ふのは蘇註の解釋、天也と見るがよい、天下邪曲の輩は常に司殺者として天道がチャンと恢々の網を張つてゐて之を捕へなされる、容捨はせぬ、其れを人が恨めしいから悪いからとて自ら手出しをして殺すと屹度傷を受ける、丁度下手な大手な大工が上手な大工になつて木を削る様なものであやまちを仕易い、注意せねばならぬ、邪惡の報は必ず現れて來るに違ひないから人は自ら進

んで之を取り押へんとせぬがよいものぞと申す。

第七十五章 言意言無爲能生

民之饑以其上食、稅之多、是以饑、民之難治、以其上之有爲、是以難治。

第一節 一客

民之輕死、以其求生之厚、是以輕死、夫唯無以生爲者、是賢於貴生。

第二節 言不求生、却生

講義

無爲自然でなければ充分に生を養ふ事が出来ぬと申す、老子の書もダン／＼と末になると説く事も色々末へ走つてゐる様である。老子に限らず何れの書と雖も盡く然りである。

第一節　そこで第一節では二つの事實を持つて来て第二節の主意を一層に明るくする、民が貧乏で食ふに困ると云ふのはお上の取り立てが餘り殿しいからである。と申すのは上たる人が自然の道を辨へないで矢鱈に奢りに長じたり無用な仕事をはだてるからであると云ふ、是れと同じ様に民がどうも治め難いと云ふのは上に立つが人間の小智慧を廻らして好い加減に事をするから無爲淡然としてゐれば決してそんな事にはならぬ。

第二節　是れが主意ですべて生ある物は植物であれ動物であれ命を惜しく思はぬ物とてはない、所て人民の軽々しく命を失ふと云ふのは如何なる譯かと云ふと道があまり生き様／＼とあせるから

の事だと云ふ、天爲の道にたがつて自ら無理をして此の生を飾らうとする、名聞のため富貴のために吾れと吾が身を忘れて打ち込んでゆく、無理をするからどうして身の長持は望まれない、と云ふ譯で之れに反し自ら生を求めぬ無爲の士は却つて長生が出来ると、裏を返して無爲自然を樂んでゆくが一番であると申す。

第七十六章 主意言柔約居上

人之生也柔弱其死也堅強。万物草木之生也柔脆其死也枯槁。

第一節 平列生柔死強

故堅強者死之徒柔弱者生之徒是以兵強則

不勝木強則共強大處下柔弱處上

第二節 言柔約可貴

考異。共一作折可從。

講義

此等は何んで剛よい物より弱い者が上に居ると云ふ道理をのべた。

第一節 生くる方は柔くて死する方は堅いと云ふ事を譬て申す人間が生きてゐる間は身體がしなやかで起つも座るも自由自在死ぬとそうはゆかぬピンと骨張つて堅くなつて了ふ草木も其の例にもれず枯れて了ふと堅くなる火につけば燃へ出す様になると云ふて生きてゐるには柔弱を主とせねばならぬと云ふ事の前さぶれを

した。

第二節 堅強なる者は死の徒、柔弱なる者は生の徒と云ふわけ戦争をしてもあまり強いと威光ばかりあつて人がなつかぬ、却て勝ちそこなふ、木でもそふて硬い太い強い木になると共に下積にされ或は柱或は棟或は土臺となつて下に壓されて了ふ、と云ふわけ物事何によらず強大なる物は下に柔弱になる者は上に處ると申す

第七十七章 主意言聖人法天道損有余

天之道其猶張弓與。高者抑之下者舉之有余者損之不足者補之。

第一節 喻天道貴平均。按水盈科亦平均也

易傳曰天道虧盈而益謙亦此意。

天之道損有余而補不足人之道則不然損不足以奉有余。

第二節 言凡人不法天道

孰能有余以奉天下唯有道者是以聖人者爲而不恃切成而不處其不欲見賢。

第三節 言聖人法天道

講義

此章は聖人は常に天の道に法つて足らぬを足し餘りあるを減ら

してゆきなさるものだと聖人の仕方を擧て天道の妙をほめた。

第一節 弓をかり天道を例へた、弓を張る時には弣の高い處を抑へ弣の下の處を擧げる、丁度天の道が萬物に對するも此れと同じて有餘を損し足らざるを補ふ、天道は常に相平均する事を好まれる、金持に授けるに馬鹿な子供を以てし、貧乏人に授けるに未來の大臣大將を以てする、滿れば缺き、缺ければ滿つる。

第二節 今度は人道を申す、天道とは全く反對て貧乏人が割合と餘計に税を納めたり、金の有り餘る人が却つて脱税したりするものも其の一例。

第三節 天道の平均したやり方を實地に行ふものは聖人のみである、と申す、聖人は此の天道の道理をよく心得て爲して恃まず、功成つて居らず、賢を見ずを欲せず、謙讓の徳を守つて能く下々を治めてゆくと申す。

第七十八章 主意言聖人以柔制剛

天下莫柔弱於水而攻堅强者莫之能勝以其無以易之

第一節 水喻

弱之勝強柔之勝剛天下莫不知莫能行

第二節 言凡人不如水

是以聖人云受國之垢是謂社稷主受國不祥是謂天下王正言若反

第三節 言聖人以柔制剛

講 義

此章も亦柔能く剛を制する心持を説く、天下中て水ほど柔なものは無く又水ほど剛いものはないと申す。

第一節 水の喩て凡そ此の天下中て水ほど弱いものはなく柔いものはないが此の柔い弱い水が又天下中て一番強いと云ふわけは天下中の剛強なものが出て來ても水に勝つものがないからであると申す、どんな物ても水にかかつては往生だ、燃へ立つ火も水にあへば消へて了ひ、剛い石ころも水には流される、木も時に水に浸かれれば遂に軟かになつて了ふ。

第二節 ては弱の強にまざる柔の剛にまざると云ふ事を恐らく天下中て知らぬものはないがさて之の道理をホントホに身に行ふものがないと申す、只獨り聖人とある可き有徳者はチャンと之を身に行ふて見せると云ふ事を三節にて申す。

第三節 聖人が能く柔を以て剛を制せらるる所を述べる、國の詭とはよごれめと云ふ意味で天子様が自ら孤寡不穀と仰せらるる様なのを指す、自ら身を引き下げて衆くの罪咎を一身に引き受けなされる、己れは一天萬乗の君であるぞなどは決しておくびにも出さるぬ、斯ふ云ふ自然の大徳ある天子様こそ眞に社稷の主、天下の王であるぞと申す、是と云ふのも自らへり下だられるかの事でもなほさず柔能く天下の剛を制したのである、後漢の光武帝は且つて我れ天下を治むるに柔道を以てすと云はれた、殷の湯王が言はれたのに萬方罪あらば罪朕が身にあらんと丁度此の節の意味に添ふてゐる、正言は反するが如し、此の正言と云ふは老子の眼から見た正言で其れは丁度俗人の言ふのとはまるで反對である、並の人は強いものが弱いものに勝ち、剛いものが柔いものに勝つ事だとしてゐるが己れの言ふ事は丸て之とは反對、世間の人の耳に入り悪いのも尤な事

であると申す。

第七十九章 主意言聖人先施徳而自不致怨

如契合

和大怨必有余怨安可以爲善

第一節 言凡人致怨而後施徳

是以聖人執左契而不責於人有徳司契無徳

司徹

第二節 言聖人施徳不責報而彼自不然

天道無親常與善人

第三節 以天道證之

講義

聖人は誠に勘辨がよい、怨を怨として返す様な事なく静かに之れに徳を施してあはれみを垂れてやりなされると云ふ。

第一節 ホンの唾で消せる様な火も大きくなつてはなか／＼だ火氣は容易に退かぬ、人の怨も其の通りだん／＼深く大きくなつた時には一寸和合がむつかしい、よし和合したとても眞底から和合は出来難いもので誠にほめた事ではない、始から怨等を作らぬ様に無理をせぬが一等であると申す。

第二節 此の場合聖人は静かに之れに徳を施して其れを報ひて貫はふとはせぬ、契は手形で一枚を二つに割り借りた者は左を貸した者は右を持つ、聖人は始めから怨のない様に心掛けさせられ人の

怨を責め様とも何ともなさらぬ、物の貸し借りに左契を持つた様に敢て人を責めたり咎めたりせぬ、有徳者も丁度聖人の様に左契を司つて人を責めないものであるから怨を買ふ事のないばかりか人から一層に敬まれる、之れに反し無徳者は聖人の様に應揚てない、徹は明也とあつて人の過をよく氣をつけて咎める事だからいらぬ怨を買ふのが常であると申す。

第三節 此處が此章全體の主意で聖人は能く人を可愛がり出来る丈けの恩徳を施しなされるが一向に其れを氣になさらぬ、恩返しするもせぬもおかまひなしだから下の者は益々其の手厚い徳に感じて敬つて来る、そも／＼天道と云ふものは何時いつまでも炳乎として明るいものでチャンと始から終ひまで一貫した筋道がついてゐて取りわけ誰々を可愛がつてやらうとはせぬが常に聖人として有徳の者にはそれ相應の助けを與へ玉ふ、とて天道の明らな所をもつ

て來て有徳者をほめた。

第八十章 主意言老子之道能使今之國民復太古是其志願也。

小國寡民使有什伯之器而不用。

第一節

使民重死而不遠徒雖有舟輿無所乘之雖有甲兵無所陳之。

第二節

使民復結繩而用之甘其食美其服安其居樂

其俗隣國相望雞犬之聲相聞民至老死不相往來。

第三節

三節一意唯逐節意深。

講義

本書を講ずる一番最初にも一寸談した様に老子は周末戦亂の世に生れて當時の煩しい様子を能く見聞したものでらしい如何にかしに之を自分の思ひ通りな國にして見度いとそこで此の章にのせてある様な考をいだいたつまり老子の道から割り出した天下を述べたので最も注意して讀まねばならぬ。

第一節 此章は一意到底節を追ふ毎に言ふ意味がダン・と深

くなつて行くのみで別に一節くは是れぞと云ふ主意はない、小國寡民とは老子の謙遜した言葉で什伯の器と云ふのは十百の器と云ふ事、民何れも自然の性のまゝに生活して敢て無理をせぬ、只天然折々の恵によつて人間の生命を全ふする、天下盡く清淨無爲の化に浴して一切の文一切の器をコテくとして用ひさせないで事の足る様にあり度いと申す。

第二節　そこで其の生活の様子はどんな風かと申すならば、民が何れも自性清淨にして無理な利慾に眼をくれないで住みなれた里にヂット自然を楽しむ、商いたり食つたりする心もないのだから舟車いもらぬ兵甲も無用。

第三節　結繩と云ふのは能く結繩の世などと熟字して易にも出てゐる言葉である昔の世末だ文字の發明されぬ前は約束する度毎に繩を結んで其の印とした、つまり繩を結んで之を用ひしめと云

よので太古結繩の世に復らせると云ふ意味になる、菜葉の飲もおしければ麻の衣も美しい、茅の屋根に茨の圍ひも樂に暑さ寒さをしのがれて人々心に何一つ不足もない、お隣の國も直ぐに彼方に見へ鶏の時を告ぐる聲犬の吠ゆる聲も手に取る様、世は治り返つて民は年老ひ死ぬる迄互に往來もせず誰れしも押しなべて心靜かに天から受けた性命を全ふする此んな思ひ通りの國にどうかして見度いものだと云ふ意味。

第八十一章　主意言所以爲人即所以爲己。是

自然報應之理也。

信言不美、美言不信、善者不辨、辨者不善、知者不博、博者不知。

第一節

聖人不積既以爲人己愈有。既以其人己愈多。

第二節 言聖人爲人即爲己

天之道利而不害聖人之道爲而不爭。

第三節 言天與聖合一

講義

己れを空ふして人の爲めにするのは一寸考へて見ると損な様に思へるが決して左様でない、人に善い事をしてやれば其が眞に己の爲めにした事になつて立派な果報がやつて来るもだと申す、世渡りの極意は何んでも己れを虚ふするに限る、己れがくゝを振り立てる

と屹度頭をぶつ、敢て事の先にならずデット静かに不爭の徳を守つてゐるが好いと申す。

第一節 信言は美ならず善者は辨せず智者は博からずと三つの言葉を引き一一之れを反駁した、美言は信ならず、辨ずるもの善からず博き者は知らず、別に講義する迄もない分り切つた事である。

第二節 聖人は自分の慾の爲めには決して財産を作らぬ、盡く人の爲めに充てる、そしてゐる癖に己れ愈有りて財産がトシト殖へると云ふのは例へば國て云へば國は元來君の持ち物で國が富めばとりもなほさず君の富となる譯である、仁徳天皇が民の富めるは即ち朕の富めるなりと仰せられたのも同じ意味である。

第三節 天の道と聖人の道とは丁度一つであると申す、天の道が萬物を生育して過たぬ様に聖人の道は爲て争はずで自ら天下の先ともならぬ故に人との争ひが無い、と云ふのでいよく老子全篇の

結末とした天道と聖道と合一した處て此の講義も了へた。

三島博士老子講義(終)

大正四年十月十二日初版印刷
大正四年十月十五日初版發行

三島博士老子講義與附
定價金壹圓五拾錢



發行所

東京市京橋區入舟町五丁目
振替東京一八五一三番
東京市神田區西紅梅町十一番地
振替東京一三九二番

明治出版協會
中外出版社

著者 三島 毅
發行者 東京市神田區西紅梅町十一番地 足立 栗園
印刷者 東京市赤坂區田町七丁目三番地 藤安藤五郎
印刷所 東京市赤坂區田町七丁目三番地 三州舎印刷所

10.6.13

356
169

終